

ひまわりからの メッセージ

90号

2018.12.10

NPO ひまわり花内
西濃園域
発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

失敗から学ぶ

挑戦することの楽しさ



とうとう師走を迎えました。一年という時の過ぎゆきの速さに驚かされます。

今年は、仕事内容も、仕事仲間も増え、趣味(?)の短歌でも色々な役が当たってきく大忙しでした。第一回目の公認心理師の試験にも挑戦してみました。こちらは予想通りの結果になりました。生来の不注意で落としてしまった問題の他に合格点まであと五点足りず(二百三十点満点)「残念だったね」と慰めてくれる夫とちがって、私は(しつかり基礎ができていないよ、もっと勉強しないと駄目だよと神様はお見通しだな)と思ったのでした。少年法も労働問題も精神科領域も、まだまだ知識は浅く、その上学生時代にさぼり続けた統計学という領域は全く歯が立たない状態ですから、不合格は当然と言えます。又、勉強する楽しさができたとね!と夫と笑いつつ、でも、来年

になったり、私の記憶力や思考力がアップする保障は全く無いわけで……と、現実的に立ち返っている私です。おまけに勉強する時間と言えば、赤信号で車が止まった時くらいですから、……これは、また大変です。

それでも、元気で一年が過ぎたこと、新しいことに挑戦できたことを喜びとしたいと思います。皆さんの一年はどうだったでしょうか。

私たち大人の一年と、子どもたちの一年を比べてみると、本当に大きな変化がありますよね。大人は一年一日のごとく余り大きな変化は見られませんが、子どもたちの成長、発達にはめざましいものがあります。私は毎年スマイルブックの継続訪問をさせていたにいてるのでよけいにそう思います。

けれど、子どもたちの貴重な時間を大切に子育てをしているでしょうか。先日、見つけた記事に、「仕事熱心な親の子に問題行動が多い」という記述があって、それは言いすぎだろうと思ったのですが、ほんの少しの時間でも、子どもたちの為に、子どもと向き合う時間を作るということは、子どもの心の安定につながると思います。私たちは、あなたのことを見守っているからね、というお父さんやお母さんからのサインは、親さんの方から「ちやうどおいで」と呼んであげることで「さっき、〇〇していたのを見てたよ」と言ってあげるだけでも子どもは嬉しいものです。叱る時だけ呼ばないで……。

研修会・相談会も 通い見えてくるもの ～子ども理解～

師走に入って、誰も何となく忙しく追われているようで、落ち着かないと思いますが、私も時間が欲しいと思いつつ生活しています。依頼される仕事を全てお引き受けしようと思うと時間が足りません。

そんな生活の中で、前にもこんな話をどこかでしたなあとか、私って成長してないなあと思うこともあって、西濃地域の市町村コーディネーターを通して配布していただいている(苦?)のこの通信で確認させていたいくことにしました。

気づいた時が 支援のスタート

このことは、何十回も言ってきたことばだと思います。保健センターの健診の時であったり、園生活の中でだったり、あるいは小学校へ入ってからだったり、気づきの時期はそれぞれ違っているでしょうが、気づいた時に、どのような支援がスタートできるのか、その先の今後に大きくかわってきます。

ところが、皆さんがいつも言われるのは、「保護者の方にどう伝えればいいのか。」「私たちは障がい児に関してプロではありません。」と、いうことです。しかし、本当にそうでしょうか。園の先生方は保育のプロであり、教員は教育のプロのはずです。

その職業で給料をもらっているのに、子どもたちの困りも見え分けられないはずはないのです。

「家庭では問題と思われないでしょうが、集団生活の中では〇〇で困っているようです。」「私たちは園(学校)で……をしていますが、お家と協力していきたいのですが……」等々、子育ても共に協力してやっていくという立場で話していくことができるのではないのでしょうか。

できるだけ、困りを早期に気づくことが、とても大事なことです。そして、気づいた後、どのような環境の調整(人的環境も含めて)が必要なのか、具体的な支援を保護者と共に考えていく必要があります。

発語の遅い子どもには、言語理解(知っていることばの少なさ)や人との関係の希薄さをもっている場合が多いのです。そのことを知って、家庭でも園でも意図的にかかわっていく必要があるのです。「ただ、ことばが遅いだけです!」とお母さんが言われても、将来、国語の読みや読解力、表現力に繋がっていくことをしっかりと伝えるべきでしょう。お母さんを不安がらせてしまうとしたら、今どうしたら良いのかも具体的に示さないままにお子さんの困っている状況だけを伝えしてしまうことに一因があるかもしれません。

幼児期のスマホ片手の子育ての弊害も、知らせていくべき

だと思っていますよ。

特性と 反応

発達障害ということばが一般的になって、医師の診断を受ける子どもが多くなってきました。しかし、現場では、かなりの混乱も見られます。『特性』と『反応』をとりちがえていることもありますし、『発達障害』ばかり好きなのともあります。『叱らないで下さい』という保護者の訴えがあったり、『取り返しをつかない暴君に育ててしまう』こともあります。

『特性』は幼少期からどこでもどんな場面でも見られます。ADHDの多動は、家でも学校でも図書館でも見られます。そして、特性は大人になっても何らかの形で持ちつづけていきます。決して『治る』というものではありません。だから理解が必要です。

一方、『反応』はどうでしょう。『反応』は、いつもではありません。相手も誰にでもではないのです。ある場所、ある相手に対して見られます。つまり、環境調整すれば改善されるものと考えられるでしょう。

『いつ』『どこで』『誰に対して』『どの様に』起きるのか、その時にどの様な対応をしたのか、書き止めておく必要があります。(ABA分析と言います)そして、その行動の要因分析をしていくのです。

私たちは子どもたちの起す行動に対して『いつも』なんです。

と、よく言いますが、実は『いつも』ではないことが多いのです。子どもが行動を起す時には、必ず要因があると考えた方がいいでしょう。

では、要因として、どんなことが考えられるでしょうか。それは①感覚要因②逃避要因③注目要因④物的要因に分類されると考えられます。

①の感覚要因は、例えば体を前後に揺らすなど、長時間一人で置かれた時に繰り返して起きたり、その行動を楽しんでるように見えたりするものです。②の逃避要因は、本人に対して何かしう要求した時や、難しい課題を求められたりした時に起きると考えられるものです。③は、自分の方に注目させたい、相手を独占したいと思って、わざと困らせたりするものです。④の物的要因は、何かを禁止されたり好きなもの(おもちゃ、食べ物、活動など)を取り上げられたりした時に起き、その物を返されると、すぐに収まったりします。これはMAS(行動動機診断スケール)というものを使って調べることができ、参考になると良いでしょう。

子どもたち一人ひとりの特性をまず知ること、そして発達についてのアセスメントをしっかりしておくことが、子育てにとっても、子育て支援をしていく周りの人々(保育者、教師、療育スタッフ等)にとっても大切なことだと言えるでしょう。テレビに出

てくる人たちを見て、それと真似て子育てしないことです。何故なり、目の前の吾が子、目の前の生徒は、テレビの中に出てくる子とは別の人間、別の環境で生きているのですから……

共感と理解の

ことばの
大切さ

友だちをすぐに叩いてしまふ、物を投げたり、蹴ったりする等、いつもトラブルを起こして困る。と言われる子どもたちは、多くは、ことばで表現する力の弱さをもっています。

「叩いたらダメでしょ!!」「何故、いつもそんなことをするの?」「何度言ったらわかるの!!」「おまけについてくる長々と話されるお説教……」この繰り返しは、子どもたちをますます追い詰め二次障害への道へと突き進ませていきます。そして、「どうせ、ほくばかり叱られる」「何でもほくのせいになる」「ほくなんていない方が良んだ……」と、自己肯定感のもてない子にしていってしまいます。「でも、やってはいけないことは叱らなくてはダメでしょう?」その通りです。

では、何故その扱いは友だちを叩いたのでしょうか?、何故、体も押したのでしょうか?、その時の大人の判断が大事だと私は思います。現われた行動には必ず意味があるからです。しかも、その扱いはことばで上手く表現できないのです。それが分かっているが「ダメ!!」「何するの!!」と叱ったところで問題は解決しません。ではどうしたら良いでしょうか。叩いた子、物を投げた子の気持ちも

一瞬で見極めまい。『イヤだったんだね』『うざりて欲しかったんだね』『腹たつんだね』等々、最初に私たちが発することばは、子どもの気持ちの代弁です。そして、次に『う』と言えは良かったね』と、その時にどう表現した方がいいのかも教えていくことです。ある学校で、子ども同士で『○○ちゃん、う』と言えはいいよ』と教えている場面に出くわしたことがありました。おそろく担任の先生の姿を見て子どもたちが学んだのでしょう。『先生、○○ちゃんが又、うした』と、口々に友だちの行動を訴えているクラスもあります。

衝動的にやってしまった時には『しまった!!』『やっちゃったね』という言葉もいいでしょう。子どもたちが、自分の気持ちをわかってもらえたこと、どうすれば良かったか、どう言えば良かったかも具体的に教えてもらえたことで、素直に謝るという気持ちも芽生えてくるのではないのでしょうか。ただし、社会的に許されないことについては、学校も家庭も『許されないことをしたのだ』という自覚を本人にしっかりと理解させていくべきです。

もうじき冬休みです。生活のリズムを崩さないように、極力努めたいですね。

お知らせ

二月のセンター親の会は、中川ふれあいセンターです。二月十八日(月)九時半からです。会場まちがわないで下さい。